

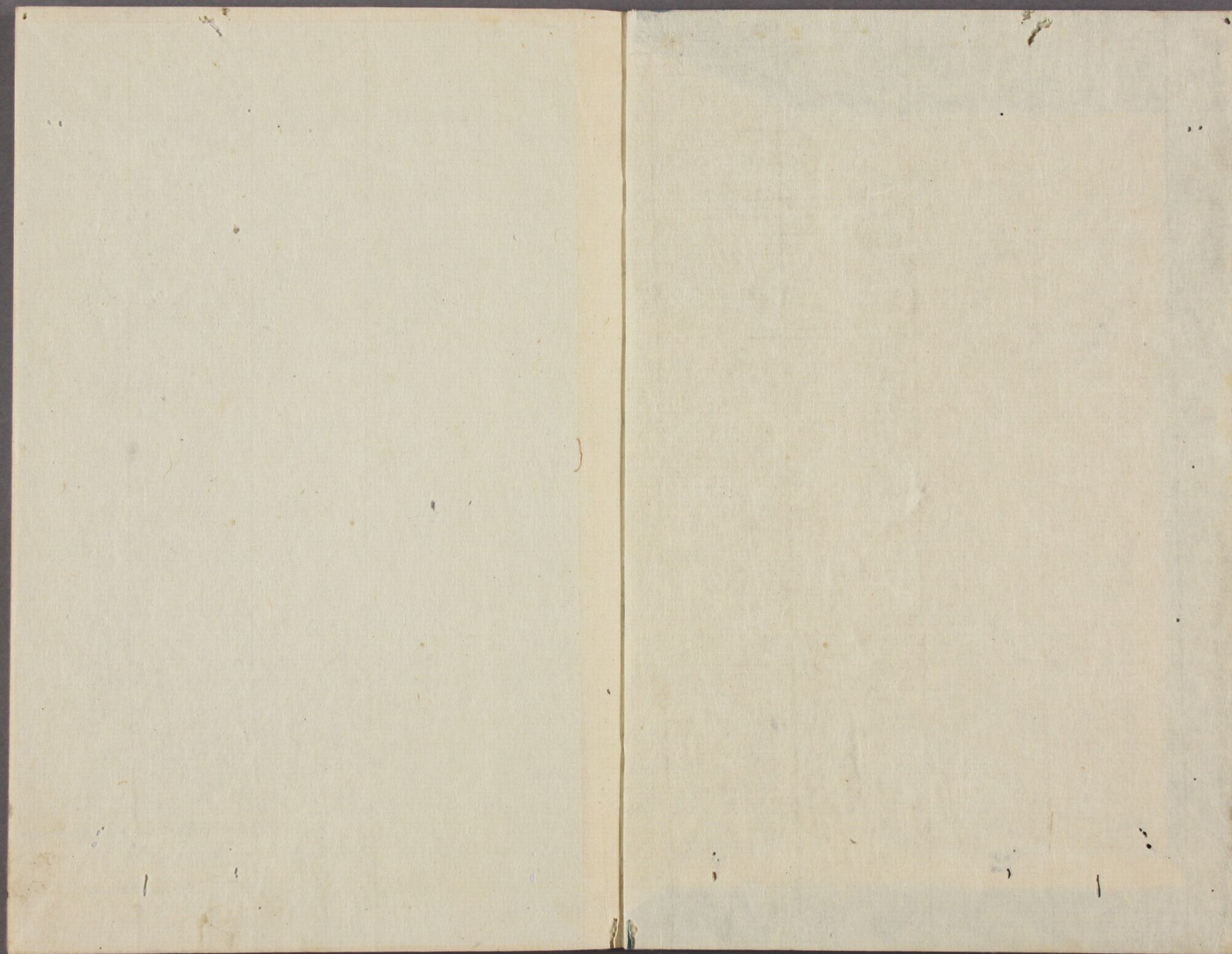


後撰集新抄

春下

三

8 9 140 1 2 3 4 5 6 7 8 9 150 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8



後撰和歌集卷第三新抄

春歌下

贈ち政大臣おまかきて後ある所までそこをきてきく。

藤原朝臣母

○此歌歌太朝臣母と源港女なり。贈ち政大臣と平院の時平

公小て歌太朝臣の父なり。

昔乃かくれる夢とむりて我身むと川の河もあるう那

○時平、云の夢と夢よなむてそこを昔きみあひるをりよか

くもど今ハ結果あひぬれど、まが身をうりた。ととのやうにもな

きううねとなり。榮花物語日蓮曼曼也のすむるそのけいきに

それなう我身むと川のあべもあるう那。新古今雅上昔えいまハ



ち代ふまかきよき花はさうなれとゆふむらさきやいぬ
 ○ち年と経ぶき名の雅よき一をて花をさくいとさうぶ
 子花のさうまうふてちゆさやといひてさねぞくそそむぬ
 付つゝえといふをさくえなる。ほあ。雪之草集より。ち代ふ
 きかきき花をさくぬぐゝとさうぬこといふやとあゝぬと有。
 はあの下句。『ゆふむ』とあるはこゝろさうすいさ。あさきとてふ
 らぬの写張なり。契沖法師も。呼菊もさういされり。

歌一〇五

よみ人あさね

あねさき花のかぎうとちかくなていつきともなくをききうぬ
 ○花といふ花のかぎう。ことごとくちうぬき花なむ。さうむと。いつ
 きともなく。さうきくをききうぬといふきなりと。呼菊といれり。

朝光朝臣とありはゆきるにさうのいふあなれぞいひけり
 けいけい。

伊勢

ちかきういなり梅も
 ねーふさう花をさる。さうと祢ぞさふ風のふきもさうね
 ○さうさうちかきうねてあんなうといまんがめ。今そそきてい
 ふ細をさば。さうよりさう。さうよりいとさうなり。根ぞえハ上
 中。さうさうさう風のさうふと何うな国どく。根共ふとつ
 ことわり。ほあ。草集より。土御門の中細云の家の隣よりさうさ
 家の花のちをさる。いひや。ねーふさきでもあうぬ梅のさう
 祢さう風のふきもさうなん。あー。梅のむさう。我のさうと
 のさうありあさきも人やす。とてあり。さうほあ。根ぞえハ風

のうといふふあつた 朝史 昔よといふをふくたさなさん
の早蕨 宇治の中君の系二条院よりつらひぬ 小神 おきし梅
かゝぬあひひして杯ご免う門ろふ花やこそねるとある 神ふきし梅と
も中君のうをさ なごふ 似てきどおり。 おん根がえといふ何
してのこまへる 桔梗 やうと。杯ご免引て女三宮よりそめ
ら中務 おきし梅 女ふとまき 桔梗 やうと。杯ご免引て女三宮よりそめ
ども見へり。

女よけうとてき

よみ人

春の日はもき思ひき忘れどを人の心へあきやまつん
○意あがり春の日のぬくゆへうよもきんぞ あき 我をいひまも
きへうにあらんとぞおのふ あき やたがたして我を あき
ふもてやあらんとねり。

あひあふ

ふもても花るるごとけき あき 春はうとね春のつさか
○春吟 宇治の中君の系二条院よりつらひぬ 小神 おきし梅
し。一首のさ あき 春はあはれる花のさく時なまむむとるることか
あ あき 人の心を思ひ出して春なうとていふな あき 我
小疎くも人もあはる人なり。それを春のあひなふのことけ
て春のつさきといひな あき 又 あき 春はあはれる花のさく時なまむむとるることか
ふひう あき 月ある年 あき 春はあはれる花のさく時なまむむとるのことか
あ あき 春はあはれる花のさく時なまむむとるのことか
く あき 春はあはれる花のさく時なまむむとるのことか
中に多し。

風をさう 花のまなこ へんげう ふうふう ふうふう

人の群。或ハ男の
あゝなどいふ
あゝてハ。うたゝに
あゝけり。いふ所

あはれなる女。つゞくやうな
子孫の氣をつくる。人の体よつと強
いひつけよう。

中の詞をいふと多
く。皆詞を加ふべし

ふ人あは

子。子。

我輩はすみと乃花の多うねどきやども人やあるとふんや

○万葉八曲の歌子すみまつとふとふー我ぞ世をなつーと一和寐
ふけるなどいふ事も何れぞかく我もま^{スミレ}藎のむの多く何れぞバゝー
来あゝ人をや何ととまのりうねとなふ。すこねは男の通ひすむ
まをもふく免うなるべし。きやどるハ来あゝなり下^雅云^ニ向雲
の来やどる客のふね系枝あげをきや日の光えぬともあり。

題不知

山をこえぬと云けり。ちをむを雲とや。その人々も。さうしん
○一肩のこえ。けりなり。山をこえ。さなり。よそとハ。遠
く離れる方といへ。意をあらわす。よそなり。よそに。つる。など

人不知

きうて、比のまゝとづく所なきはあり。

又長恨所子芙蓉如面柳如眉など狂多うり

かなづちで世をやらうて奴等のためにも何となく

一
き
け
次
小。

○殿上ハ、テンジャウとよむなり。
殿上のをのことハ、殿上人

のりなり。敷上。又、殿上人のすし。下、雜一の毛。 所恒主ハ、前甲
斐目と。古今の序にも見えて、残友なるを、おとくに殿上人
の中に、石より、まゝの如く、すゆるを、おみいみどくすぐれ
たる、ある人、なまどき、やうのゆゑ、ふてもあべー。か
ざき、れとハ、むなどを折て、頭、まきすこと、なり。あうきん
ふ。又、ゆり、おなど、を、かざき、とり、ふ、解、なり。解き、の
畧、うり、たる、を、な、へー。又、今、さす、を、かざき、て、かざせ、かざ
用、なり。

かざせども、毛、ま、か、り、ぬ、は、ま、き、乃、れ、を、も、く、ふ、せ、り、解、なり。
○花、か、を、頭、ま、き、せ、ど、嘉、老、の、形、も、隠、く、さ、ぬ、古今、の、ま、き、ぬ、
か、ざ、ん、毛、の、い、へ、ど、今、ハ、我、が、嘉、老、の、ふ、く、き、姿、も、隠、き、れ、ど、
か、か、ざ、れ、も、こ、も、て、花、の、面、目、を、ま、き、べ、と、れ、り。 お、め、て、お、勢

を、保、ま、面、目、失、ひ、と、い、ふ、お、ま、り、枕、ま、き、さ、う、ら、お、柳、の、眉、の、む、ろ
お、り、て、ま、の、お、も、て、を、ふ、す、を、お、り、ぬ、續、お、載、雑、き、ま、ち、お、も、て、ふ
せ、や、と、思、へ、も、や、を、づ、き、に、く、れ、ゆ、く、ら、ん、な、と、狂、あり。 ま、ふ、
お、も、て、を、ね、ま、き、と、い、ふ、詞、あり。そ、ち、保、ま、面、目、を、ほ、ど、こ、す、と、い、ふ、
あ、り、て、今、の、お、り、て、お、細、の、互、對、なり。仲、文、集、堀、河、の、中、ま、う、せ、さ、お、
や、う、べ、せ、と、極、楽、の、お、り、て、お、こ、い、ハ、己、
ま、の、と、ぞ、せん、又、時、吟、日、記、な、と、にも、そ、り、

歌、ま、り、
お、み、人、い、へ、と、ま、

一、と、を、り、か、さ、り、る、ま、乃、あ、げ、こ、と、ふ、う、び、お、を、ん、と、た、の、ま、え
○ま、り、る、ま、の、な、き、ゆ、ま、ふ、二、度、む、と、ん、り、お、お、ま、れ、お、ど、い、と、ま、の
お、り、こ、の、を、き、と、お、り、る、後、拾、遺、上、と、を、ふ、お、う、び、も、こ、ぬ、る、
な、ま、ち、い、と、お、く、く、ま、を、を、こ、と、見、ま、

さひよかせうり
をれど、ひつうは
いふけり。

○ほ何れ、主客の詞たひいて、いとよぢうけしき、たのめく
あゝむべしとつゝも、然るも、

ふ人あはれ

妻あたらがづし、兄一ふゆゑ、うゑとてけるあとのや一さ
○花をぞたなまなぐ、兄とて、いふと、兄とて、然ありと見つけらる
て、悔しとて、を、表ふて、未をるゝんむくれて、思ふ、おもふを、と
免おきて、今さうやといへばなり。妻あはれといふ、ん料なり。
はあ、おかし、伊勢家系、うゑあたらがづし、兄一むなむとて、さ
を、ける、然る、れ、きとありて、家系を、詞とて、いふ、か、さ
と、さて、いづれ、いへ、も、然と、いふ、むく、に、うけて、いへ、なり、文字
を、さの、然と、いへ、む、なり。

を、と、こ、れ、と、や、う、たの、免、か、こ、て、付、合、せ、ど。

○たの、免、を、令、頼、お、て、我、また、の、す、む、なり。

妻、日、さん、あ、たら、が、うゑ、は、の、うゑ、ど、けて、君、一、思、ふ、む、さ、も、た、の、中、
○花の、末、葉、の、す、で、ら、うゑ、ど、けて、い、まん、序、なり。うゑ、ど、けて、心、
解、て、さ、て、な、どの、何、等、同、じ、い、ふ、うゑ、ど、けて、い、まん、が、め、一、君、さ、ふ
ん、底、と、けて、我、を、思、ひ、ぬ、さ、て、我、を、さ、す、君、が、た、の、す、一、免、給、ふ、め、く、に、
た、の、い、ゆ、ん、と、なり。契、仲、は、呼、云、万、葉、十、四、葉、さ、く、花、の、うゑ、を、
の、うゑ、や、さ、ふ、さ、ぬ、を、お、き、あ、る、を、一、思、ふ、今、の、あ、ら、妻、日、さん、
さ、一、ん、は、うゑ、一、万、葉、の、あ、な、さ、す、一、む、妻、日、さん、さ、く、お、て、や、あ、ん、と
い、ま、れ、さ、さ、う、こ、と、な、る、べ、し。

歌、一、うゑ

伊勢

うきいふ身をあひうへどちよきも我おふして茶を足てす

○我身と云ふたぐひを月をうへて。我が身になうたうバ。あつても。をど我がそのなりとて。らんものともなり。重之氣。しみぢ茶を。かのぐおとも足て。ぐねる。いさむ。人となれど。

元良のみこ。萬葉朝臣のむすめ。みゆき。と。は。元良。おきて。かの。洗ふ。さぐ。ひ。なれど。え。あ。ふ。こと。も。ゆ。ぎ。り。なれど。わ。さ。や。し。は。ま。の。ね。お。さ。て。かの。さ。う。い。ふ。さ。い。お。う。せ。け。る。

をさういふ

○は。だ。え。の。元良のみこと。云。つ。む。ご。こと。は。元良。除く。べ。と。は。元良。孫を。足。て。り。は。元良。寛平。は。元良。にて。宇。賀。上。皇。の。後。こと。なり。う。き。萬。葉。朝臣の女を。め。して。未。雀。院。う。又。ち。亭。子。院。など。

は。元良。の。後。元良。も。替。う。ふ。あ。ふ。元良。親王。ハ。え。さ。ひ。あ。ふ。さ。う。なり。さ。う。ハ。曹。司。にて。女。の。局。を。よ。なり。

花のきをむう。な。う。に。え。一。人。の。う。あ。れ。さ。う。り。ひ。け。を。○橘。花。の。色。を。か。く。さ。や。の。う。ふ。て。か。さ。う。ぬ。み。我。が。逢。え。一。人。の。人。も。か。さ。う。け。て。なる。さ。う。なり。え。一。人。と。ハ。萬。葉。朝臣の女を。さ。て。の。さ。う。なり。さ。て。は。は。あ。ふ。て。見。ま。は。は。橘。を。則。女。の。家。の。樹。など。ふ。や。あ。う。ん。女。と。共。ふ。去。年。ハ。え。な。ひ。一。む。の。め。く。も。す。ゆ。ま。な。る。

月あけき夜の。お。り。ろ。か。り。け。る。お。ま。を。足。て。

源。さ。う。あ。き。

あ。う。新。月。と。む。と。を。お。お。く。ち。ん。あ。ま。う。ん。人。う。足。せ。を。や。

前栽は山吹あるありて

兼輔朝臣

わがまはるむとくも山吹のやへの毛にもねとく新柳けそ
○一首の意もかくねる所なれど意のそねどをさうふふくえら
まゝるやうにもすゆとくにおちたる女の個どておちたる衣
ねどをきてそ女の家より来るをうねどよすれさるにあらど
のわきと二ふなくむとくふてといふはまば山吹のやへをなれ
ふにもねとくべといふまのやうなり。 契沖法師の五位の時のも
なとくといふねとくどいふあらん。 むとく衣とハ俗よつ
け襦袢といふおちのおなりと正明の云。 山吹といふ色ハ表
黄・裏青なり。おちて青・裏黄なるをば山吹といふ。 花を餘情
などにもさくしり。

題は山吹

在来元方

つとてふふとびさうぬ花なれさうりさう城人をいひやう
○一年の回ハ二度といふふれまねた一度さく花なれどさう
をさみて人のさくしりさう理なるさうなり。 人をいひやう
を俗云ふ。彼はいふなどいふんがめく。さうとさうがさういふさう。上
中。小。山吹といふいふねんさうとあるお国ト。一とせ。ふとくさ。お
ねの約りさうかて。た。一年二年といふとくさるさう。さうさう人
いささう。ねとくねど。一年の回といふんがさう。一年おと
のたさへるなり。

寛平は時さうさく花の意ありける。おのあり付なれど。

○桜花の意ハ。を賞て。詩や後編の法遊などあるさうなり。源氏
物語の花。あ。葉花物語の。月あなまの。花。皆同ト。意字ハ。着にて

○女どもと、あそびんとて、まゝと、あそび、を、と、文字を一つ、写して、
せ、な、い、と、紙、を、ハ、女、共、と、まゝ、と、い、つ、つ、り、明、記、バ、な、り。

春
う
れ
ど
花をえん
えんと

○抄云。世への事とてふ立なれども。思ふ人の事とてふ立
いそがしくなり。人の心とてふ事。今人の心ふても。
かゝいふなるやうに思ふれども。人の發起する事。かゝも
いそがしくなり。一本は。世への事とてふ立なれども。かゝ
る事とてふも。思ふれども。思ふ人の事とてふ立なれども。

つゝ子結云。源清彦
朝臣あひまゐりけ
るを。久しうとわざ
りしれど。さぞうり

小石を
け。

○一首の意ハ、万葉十「我々ハハハ」もあゝ免日が家の基牆を足ふ
をふどと也。新古今^上「と久こり」梅さかめなる我衣をうと起も人
はをうふこそうれなどゝ歎あり。 春家ハハハといちん料のこ。

うから免る。倭言ふ。イヤニアラウケレと。うき月と。うき
もんがめく。姿形の兄が。ききかて。さて。姿形の兄が。きき
そく。馬。物なり。そいとけ。く。馬。を。即チイヤ。馬。なり。下。雅一
かい。世の海。のつりのうげな。き。戸。な。と。海。きん。を。こ。に。ま。り。を
そ。と。ある。奇。詞。を。那。ど。を。も。兄。合。せ。て。ん。り。べ。い。世。を。う。き。世。と。い。ひ。五
の上。か。て。う。き。人。な。ど。い。ふ。も。驚。く。馬。を。か。て。又。那。う。や。な。れ。ど。も
う。き。世。と。い。ふ。時。に。表。が。い。と。け。く。イヤ。か。馬。と。世。う。き。人。と。い。ふ。を。
我。を。驚。す。く。イヤ。か。馬。人。の。子。か。て。
い。ひ。か。て。ゆ。け。ど。一。つ。ん。ふ。お。つ。る。なり。又。二。ク。イ。ニ。ク。ラ。ニ。イ。那。ど。い
ふ。意。に。も。つ。う。人。意。を。イヤ。あり。と。い。ふ。と。同。ド。こ。と。なり。

七

山梅香 五十六

伊勢

○後撰集新抄三

○禁中に仕奉るが今石上よりこもりあがり。

よき人あり

神さびてありけり。さきふすむ人々を初め、やふをさきより見受
○神さびても、旧くなりてといふんがめし。我は古くなりて、そのうへ
古きよりいひなりていせる布留の里はす免ば、所を果て、初め
とて、は時をさきみやふをさきにも見ばなり。神さびて、万
葉考別記云、佐備とも四くさばうりふなり。○一つは進
むるを須佐備まゝ、佐備ともいへる。古事記に、速須佐之男命云く、我
勝云而於勝左備離天照大御神之營、阿理其備云く、かの今よりけり
小備より、はる勢ひの進ふ物を荒しなど、ゆゑを、後佐備といひ
て、荒進む方よりいへる。○まゝ巻七 万葉集 小、新羅は、咲蘇左思より、は
る、荒進む方よりいへる。

きまのてふも、たゞの嘆進むなり。巻十八、前佐備勢年てふは、老
のん進みせんといふて、然いふ時、人の和進みさすお同ども
ずさし、あづささみねど、いふなり。巻四、小、雪さにも、ゆゑたり。さ
意進見たり、は、直みあすてふ、意進の字を思へ、神佐備と
いふも、同ども、は、巻一、小、神長柄神佐備世須登芳野川より、即
天皇の神佐心のすさみせさせなり。○二つとも、只神さび
あつて、すさみをも神さびといふ。は、巻五、耳為之青菅山者云く、神佐備立
巻六、小、神さびる伊駒高福などの数多し。巻二、宇真人佐備
而、巻九、小、遠等、咩良何遠等、咩佐備周等、おどいふも、かのすさびよ
る、出で、物のさきをいふことも、ぬ、是、一、なり。ならの中、ま
を神備とのともいへる。○三つとも、かの神さびとすより、す
船よりありて、言の畧なり。

轉じて、たゞ^{ちび}くもるも^ふ成ぬ。卷十四^今。ふ、いつの^も神佐備け
る。香具^{カグ}山のほこ杉^{ウレ}が^{コナ}生ずで^{ムス}。卷十二^今。ふ、神佐^{カミサ}夫^サ等^トいなに
を^ある^は。卷七^今。ふ、^石上^{ウヘ}あ^るのか^に杉^カ神^{カミ}さ^サ備^ビ而^ニ吾^ガ更^ニく^ハ。意^イふ^ハあ^はひ
かけ^キと^さへ^ある。○四つ^ハふ^ハと^さう^ハさ^ハび^ハと^さう^ハ。さ^ハと^さう^ハと^さう^ハ。さ^ハと^さう^ハと^さう^ハ。
さ^ハび^ハの^ハう^ハ。此^ノ石^ノの^ハ用^ノな^ハう^ハ。猶^{モトモト}下^カの^ハ不^レ。ふ、い^ハさ^ハの^ハい^ハふ^ハを^ハ引
合^ヘせて^ハ見^エる^ハべ^シ。

法師^{ホウシ}は^なん^ノの^ハあ^はう^ハける^ハ人^ヲ。や^まや^にま^うりて^ハ。お^ど久^クく^ハ傳^ハ
て^ハの^ハち^ハ。あ^はひ^ハあ^はう^ハて^ハ傳^ハ々^ハ人^ノの^ハも^ハく^ハう^ハ。月^{ツキ}ご^ハる^ハい^ハう^ハに^ハど^ハ。花^{ハナ}を^ハ
さ^ハけ^ハう^ハや^ハと^ハい^ハひ^ハて^ハ傳^ハ々^ハね^ハど^ハ。

○此^ノ詞^ノ書^ハ。あ^はふ^ハに^ハな^ハん^ノの^ハあ^はう^ハける^ハと^ハい^ハふ^ハ詞^ノを^ハ。此^ノ作者^ノの^ハ
み^づづ^ハう^ハ。此^ノ家^ノ集^ハは^なる^ハう^ハな^ハる^ハべ^シ。あ^はに^ハあ^はう^ハう^ハぬ^ハこ^ハや

つう^ハの^ハ結^ハ云^ハ。あ^はる^ハ人^ノの^ハ大^ハ和^ハ子^ハま^ハかり^ハて^ハ。
お^ど久^クく^ハ傳^ハ々^ハ人^ノの^ハも^ハく^ハう^ハ。月^{ツキ}ご^ハる^ハい^ハう^ハに^ハど^ハ。花^{ハナ}を^ハ
さ^ハけ^ハう^ハや^ハと^ハい^ハひ^ハて^ハ傳^ハ々^ハね^ハど^ハ。

ね^ハる^ハバ^ハ。此^ノ集^ハ子^ハて^ハも^ハう^ハな^ハき^ハう^ハづ^ハう^ハご^ハな^ハり^ハと^ハ。つ^ハう^ハの^ハ結^ハ

ふ^ハい^ハな^ハれ^ハう^ハり^ハ。

み^づづ^ハう^ハ。此^ノ家^ノ集^ハは^なる^ハう^ハな^ハる^ハべ^シ。あ^はに^ハあ^はう^ハう^ハぬ^ハこ^ハや

○花^{ハナ}の^ハ咲^ハう^ハな^ハど^ハい^ハも^ハん^ノと^ハあ^はる^ハ。た^ハな^ハあ^はる^ハ雲^{クモ}と^ハ見^ミゆ^ハと^ハなり^ハ。古^コ今^{イマ}と^ハ

ミ^づづ^ハう^ハ。此^ノ家^ノ集^ハは^なる^ハう^ハな^ハる^ハべ^シ。あ^はに^ハあ^はう^ハう^ハぬ^ハこ^ハや

亭^{テイ}子^シ院^{イン}の^ハ奇^キ合^カは^ハう^ハ。

○拾^{シツ}芥^カ抄^{セウ}云^ハ。亭^{テイ}子^シ院^{イン}。寛^{カン}平^{ヘイ}法^{ホウ}皇^ス御^ミ所^ノ云^ハ。西^{セイ}洞^{ドウ}院^{イン}と^ハ抄

小^コい^ハ一^{ヒト}。宇^ウ多^タ天^{テン}皇^スの^ハ下^カに^ハお^はり^ハて^ハ。始^{ハジメ}ハ^ハ東^{トウ}菴^{サウ}院^{イン}と^ハ抄

あ^はる^ハ。又^{マタ}亭^{テイ}子^シ院^{イン}を^ハ造^{ツクリ}て^ハ。そ^ノと^ハよ^ハお^はり^ハて^ハ。始^{ハジメ}ハ^ハ東^{トウ}菴^{サウ}院^{イン}と^ハ抄

小^コい^ハ一^{ヒト}。宇^ウ多^タ天^{テン}皇^スの^ハ下^カに^ハお^はり^ハて^ハ。始^{ハジメ}ハ^ハ東^{トウ}菴^{サウ}院^{イン}と^ハ抄

見えては奇合と。延喜十二年の事なりと。古今集抄秘本に
たり。

ふさふさしたぬふ時まつゆりも夢の白雲まよふまけ
○一首のまかかれふあなり。古今^集「橘まきけ」もあ。山の
山のうひより足ゆるあふも。

乃一
山橘を足て。

○山の橘を足てといふまじなり。のほどは。はようつーおとせ
ふてもあふべー。やどて一本にま。山乃とあり。

夢く

ふくもとそつるまをきくまきまらるやもことなり
○古今^集「橘まきけ」のまきくまらるやもことなり也

ふ。今のむことふなるといふ。たうとあり。

だいー

ふくま

我高のうげとむたのむ高乃

ぞ候哉

れまよりともなうなりをう高乃

○抄云。うげとむたのむ高乃れまよりともなうなりをう高乃
なまにまきくまらるやもことなり。は。い。ま。き。く。ま。ら。る。や。も。こ。と。な。う。な。り。
ゆ。な。ま。き。く。ま。ら。る。や。も。こ。と。な。う。な。り。は。い。ま。き。く。ま。ら。る。や。も。こ。と。な。う。な。り。
む。な。ま。き。く。ま。ら。る。や。も。こ。と。な。う。な。り。は。い。ま。き。く。ま。ら。る。や。も。こ。と。な。う。な。り。
あ。ふ。ま。き。く。ま。ら。る。や。も。こ。と。な。う。な。り。は。い。ま。き。く。ま。ら。る。や。も。こ。と。な。う。な。り。
の。ま。き。く。ま。ら。る。や。も。こ。と。な。う。な。り。は。い。ま。き。く。ま。ら。る。や。も。こ。と。な。う。な。り。
三。う。な。ま。き。く。ま。ら。る。や。も。こ。と。な。う。な。り。は。い。ま。き。く。ま。ら。る。や。も。こ。と。な。う。な。り。
などの類あり。お。は。ま。き。く。ま。ら。る。や。も。こ。と。な。う。な。り。は。い。ま。き。く。ま。ら。る。や。も。こ。と。な。う。な。り。

花を記さう」と伺ふあり。かくても屏風などの繪をよほしたる如家
盛しきてもいふくふくんゆらふなり。我々の言くといはは海づ
から家の言のまゝなりて
いへる。なみふをうはなといふのあつては波のまゝあるま月のあや
ふげふくゆきどお見えするををうねくいへるなり。――拾遺夏
のいふあれでをいむいなく花の影をうけつるをば波をうけるや
あるなどをも思ふべし。おまなうくはをうけなと云んを
さへるなりといへるまゝなり。

花さかりすもさぬま若野川うけふうつろふき――乃山ぶき
○抄云。盛るそあそふ川よりとらふまを水の影は山吹のう川ろ
ふとねりといふ。然るべし。水は影の映ると花の散移落と伺同ト
きにうけてかくといへるなり。かくさ月小いさうなる伺のよさ
た人の風雅といふまゝ多きなり。こ
をうさふくんゆへきことねりう。

人のんたのみがふくなりけきば山ぶきねちまきさしたるをを
を二か
えよとてをいける。

○あそふたるとちまかしてああるをいへるなり。六帖ふ
いとまふねるぬ家秋のうのみふを枝に影をさすみけ
ふともあそ。

まねびうのなきて嘘乃をいむをともまふげう川ろ山吹乃花
○ふそふ川ろふ人をいみく。えきびあへき。我があきたなくと
もあそでねるさのまなくなりゆくまよとなり。無奇なり。

やよひむうり。の花のさかりふ。道まかすけるふ。

○やよひむうりの花の文字ハ例の誤なり。――まてて。伺ふに
かくふありまいへる。やよひをかき。あそ月をうりねどいへ。

ふき花のさかちふえ。そちやふひの事なりといまんが
めく。いつたころといふ事を。かろくいひおくねなまを。や
ふひをうり」とよき切て。花のえくとんぼべし。さるゆゑ。の
文字を入て。下へは。ふき花とを異なる。ついで。ふき。一年十
まき。だなどりふき。やふひを。生なり。きさう。花の。衣更。著
なり。花ど。り。花の中にも。花の。えく。す。ゆ。も。あ。ま。ど。そ。ま。を
ふ。本。ま。の。ひ。な。ど。て。ま。さ。な。き。い。ひ。ま。ま。なり。この。月。の。事
と。い。ふ。その。ひ。は。ま。き。ゆ。え。う。ある。事。と。え。う。なり。花。の。人。も。
思。ひ。より。なる。事。も。あ。ま。ど。い。ま。ど。よく。も。思。ひ。さ。だ。め。さ。ま。だ。
い。ひ。づ。う。とい。ま。れ。う。り。縣。大。人。乃。花。も。あ。れ。ど。花。い。の。う。
あ。う。んと。思。さ。る。ま。ば。う。り。を。奉。げ。お。の。ま。も。い。さ。う。考。
ま。る。事。も。あ。ま。ど。花。い。の。う。あ。う。ん。お。つ。な。け。ま。今。ハ。ま。ど。
し。つ。花。ま。ど。も。花。生。衣。更。ま。ど。の。花。ま。き。を。免。て。む。ご。こと。花
ま。ば。う。り。花。生。付。と。か。き。た。う。本。も。ま。ま。他。の。月。の。名。も。花
の。さ。り。ふ。い。ひ。なる。事。も。や。花。を。ま。う。ん。す。き。
こと。な。ま。を。一。わ。り。お。ど。ろ。う。い。お。く。なり。

僧正通昭

をうつもばをぶさうけがなて。花づう。みよの佛子。花たて。すの
○花を折ま。ふ。ふ。れ。て。花。ゆ。え。小。ま。て。ある。ま。す。にて。三世
佛。ふ。ま。う。なり。と。云。き。なり。戸。こと。にも。花。の。花。神。の。ま。く。な。ど。の
めく。達。中。な。れ。ど。お。ね。て。物。せん。便。あ。き。ゆ。え。に。ま。あ。が。う。なる。を。ま
ふ。さ。小。花。と。い。ひ。花。い。ま。ま。に。なり。云。う。る。花。ハ。本。ま。ま。の。佛。小
供。ま。る。事。なる。を。今。ハ。た。て。花。づ。う。と。い。ふ。小。ま。ま。て。三世。の。佛。小。と。廣
く。い。ま。れ。う。る。な。ま。べ。し。た。て。か。づ。う。と。ふ。と。思。へ。ど。た。ち。な。づ。う。と
あ。ま。ま。き。や。う。花。ま。ど。も。然。ら。ば。た。て。か。づ。う。ハ。ま。ま。て。ある。ま。す。にて。や
い。ふ。ま。な。れ。ど。なり。又。た。て。花。づ。う。花。よ。と。云。う。け。う。る。に。ち。あ。ま。ま。
思。ひ。あ。や。ま。る。べ。う。う。べ。は。あ。ま。ま。下。花。向。の。花。に。さ。る。ゆ。え。小。と。い。ふ
事。を。加。へ。て。花。ま。ま。と。わ。り。う。さ。く。ん。ぼ。ら。う。なり。かく。て。花。説。小。

神樂歌は、みづ垣の神の清代よりきね系をたゞきにとりて阿そ
びくろーもと阿そをけあけもぶさのす子引るを誤なも、神樂歌
のまぶさハ、も草をうゝひ誤るなれど、あゝ引るあゝぬこと
なり、手草ハ、古俗拾遺、あゝ古事記、磐屋戸の股子、竹葉を手草とすと
云、詫あれどなりと、師翁いもれなり。

歌一ら更

与み人あゝ誤

みか庭乃毛さへ深き松がえりふと勢強うゝて、さげも庭かミ
○水やう川ふ緑の毛も又深き松枝ふなり、松は掛まる庭な庭ど、ふと
せをわきてとまゝいへふなり、此も、水辺の庭をうゑるを端なく
して、松と勢をうゝてとえわたりなどいさうやうありげふ
す也、もーハ上の、云ううとも、はふさうふ、など、同く、屏風の

繪などをよみけるに、あゝとらうとも思へど、うり阿なれど、は
免がさ・を、おぢなこともり、花の垂て、龍くおなまき、なこ
と、なびきの約束りるなりと、縣長大人いもれなり。

やよひの下お十日がかわふ、三條右大臣、兼輔朝臣の家に、あわ
るゝて、はるるに、庭の毛さけるやり、水のほとりふて、かきあれ
おわさねさうへけふついでふ。

○此詞由、三條右大臣の五文字ハ除くべきうゝつう、ひねふ見

えり、他考のみけり、
の名なれバなり。

やまも、庭などふことふけり

て、あゝかたさへ流しや、或は便よきおみて、川の毛を
せ、入て物などもあゝる水うて、今せよいまゆる衆水な
る、第本毛なる、紀伊守の中川の家のさ方なぐて、よくんは
らゝなり、やうり水とまゝなり、
も阿まど、そゝ誤なり。 大みきハ、オホミキ大序酒なり、酒

〇二十八

朝ぼろ下ゆくをあきけとほろど花乃色もろけ
○げあふのたすめく一帯をかあてて人の中を流き
ふもあふもど人のそとなりハ、ほろどぬきんあふびとんゆふ
なりとりあふとほ。下ゆ水あふ表れてもやあふりて、裏
のきけも右大層のかへりゆき終ふをいふなり。

あひーらば

あふ人あふ更

鶯乃系りもろ玉柳ふあふみどり花も花のやうう勢
○僅馬樂子。玉柳を片あふりて雪のぬけてもあふ梅の花のそと
て。柳も雪あふりて物なまは。吹かきもあふ風も合
するなり。 みどりハ合乱といふんがめ。 玉柳ハ僅馬樂子さ砂の
言さでね。さいさこのをのふたてあふ玉柳玉柳などもろけ

より。な柳をきいていへるなり。

はろの花のちるを見て。

○此詞も。梅の花のあふる本の中にて。などあふまふき
こちね。あふもいあふる後のすなれがなり。

みどり

川のすふあふもぬらんさうばあおもうげふのいろ城見替つ
○抄云。さうりの時の候が柳にて。川のすふあふもぬらんさうばあおもうげふのいろ城見替つ
なりといへ。あふもぬらんさうばあおもうげふのいろ城見替つ
ぬらんさうばあおもうげふのいろ城見替つ
とあるも。あふに。上は。あふもぬらんさうばあおもうげふのいろ城見替つ
あふもぬらんさうばあおもうげふのいろ城見替つ
あふもぬらんさうばあおもうげふのいろ城見替つ

さて六帖よ。さうざうんとおそれし様をれおもへげおのこま
なきえゆん。新勅撰^あよ。おもへげおのすけをえとてい
屋^あし。未ぬ筆の白雲とあるなど。いまだ書をえざる。紙の思
ひなりにて。書をえるうちおして。面影えゆるさなり。はあれも。
あさる後となりて。おのまがろーなどのめく。そとくとをりか
のかき覚ゆるんなり。^{おもへげも。俗子。タハ目ニ} 同し。何ながら。此
ふいへるさ。わのうにあり。おき方ふいへる。おて。おひざり。^{六帖。新勅撰}
と。さる。思ひまがべうべ。^{六帖。新勅撰}

あけそのみこの。花え侍る。おて。

○教実親王ハ。宇多天皇の皇子におせり。

源中宣朝臣

ちる。おと乃うきも。志をて。あそれと。こ。紙。様。やど。はる。こ。あ

○花の。盛ふう。け。きをえて。あ。さる。の。憂きを。ば。て。あ。それ。見
事。な。お。と。や。と。い。ふ。あ。それ。と。い。感。ん。の。何。を。花。よ。かけ。る。お。と
お。お。となり。あ。それ。を。を。賞。ゆ。え。に。あ。は。き。と。長。大。息。こ。と。お
る。契。仲。は。師。え。様。お。や。ど。れ。と。い。お。の。上。子。を。く。り。なり。

桜の。ちる。を。え。て。

ふみ人。あ。い。

さ。さ。る。色。に。きた。る。衣。乃。添。れ。お。す。る。月。日。も。を。け。と。も。お。し

○古今^あよ。桜。色。に。衣。を。け。と。も。お。し。て。お。ん。お。の。お。なん。後。の。か。み。に。と
あ。る。さ。ら。桜。色。を。添。く。る。免。て。お。つ。ま。お。さ。る。ん。後。も。お。の。記念。ハ。あ
ふ。ゆ。え。に。月。日。の。さ。る。も。さ。る。も。を。け。と。も。お。し。なり。さて。古今。お。前
の。桜。色。を。後。世。の。後。子。桜。重。なり。と。て。表。白。重。赤。花。と。い。へ。る。さ。る。と。

と。縣民大人いふも。此様もといへる。たゞ様の末乃をいといへる
なり。一。様もといへる。さだめれる様をいへるにあらうと。横井
秋翁もいふなり。さきバはなるも。古今。同ト。様の末乃をい
ふなり。一。

やよいふうふ月あると。はうさるのころ。申文ふきへて。左
大臣家よりけり。

○公事根源。京官除目。是ハ三月三日より見たり。べき
なれど。系にある諸司を任らる。な小。系なといふなり。
一。縣令ハ。外官をむ。と任ぜらる。なり。外官といふ。諸司の
なれてけり。一。司召ハ。事の事。縣召を任なり。
一。縣令ハ。縣召の事。委く。申文ハ。我
なり。記を。中。折状なり。なり。

要る

あふりさ。あふりさ。き年。だにも。き。か。なり。なり。なり。なり。

○當。三月。閏の。ある。君の。傳。は。餘分の。ある。や。なり。なり。

せ。て。さ。か。く。餘分。ある。年。なり。なり。傳。の。事。ハ。必。遇。を。了。し。き
なり。なり。後。漢。書。張。純。傳。云。閏。歲。之。餘。一。年。何。れ。なり。なり。

か。なり。

左大臣

つ。より。もの。ど。け。か。る。登。き。なり。なり。光。小。人。の。あ。は。さ。る。なり。

○一。首。の。さ。か。り。なり。上。句。ハ。三月。閏。の。ある。を。い。へ。なり。

ふ。て。傳。の。事。ハ。さ。り。なり。か。け。り。下。句。ハ。い。り。て。傳。の。事
を。た。て。て。の。事。ハ。なり。一。年。の。事。ハ。なり。初。二。句。ハ。閏。月

の。ある。なり。閏。の。年。ハ。なり。なり。なり。閏。三。月。ハ。なり。

○三十二

○いまも夢あゝぬ時をかく言へば、是の夢小なる事と頼しを
そのたのしき夢も立てもささるんゆゑもわきて、夢の日数乃
限も今日にてある事となり。かくて、此夢の表のなるといふ
をハ、行先小変^ナ、何時^イも更^ナるなど云ふ時、移^ナ變^ナをいふ詞にて、さて
裏のそめて、身^ナの昇進^ナするを成^ナ出^ナともなるものとも云ふ、この詞
小きうして、此夢などハ、出^ナ身^ナする事と頼し、そのを、是時夢の夢ハ
けふ限ふてある事よとなげくをいへるなぞ。二、三句はさ
了れど、必^ナふと先^ナなる語をいへると思ふ。三月も、同君ある月なれ
どなり。

よみ人——

花—あゝど何うは夢のを——んともいへばなげうぞも——

○花—あゝど何うは夢のを——んともいへばなげうぞも——
あなり、曾丹集^ナ、夢の昔のねう——とあるものやうに、夢をも、我
—はげうま——後拾遺^ナ、夢を夢とて、何うも夢を人のを
あむと——かなど、何ををも、引合せて思ふ。

み部終

とれて又あすとなになま夢、昨日を花乃落りてけふもくもん
○夢昨日を、夢の日は、夢のをといふことなり。花のうけふての夢
も、梅は、このきくべ、夢を夢とて、花をいふなぞ。——
も、さうとよ、又あかなとのこよ、夢も、何れも、梅とみと、
さうで、な、夢とよ、さうも、夢をよめるなりと、夢中阿闍梨
も、夢中大人も、い、さうなり。然るに、夢は、夢をよめるなり。
ふをも、か、さ、夢とて、さうも、さうなり。

三月のけふより昨日、いさ——うさうで、おぬ——いひて、ゆゑ、ふ

つり、夢、さ、や、い
の、ほ、さ、の、目、人
の、碎、か、え、う、まう

のわくにまけゆる。

○まうでこねりハ、久しく来るもぬとふりなり。

晉申氏

又もふん時や思へどきのすれぬ我身あゝあはばをきまうね
○かゝる事も。又本年ハあづきりごとく思へども。我身の存命ナカラヘ
あらうの頼まき。今日言ひし如く。そく思ふてさうかと
是。然らば。初二句ハ。春あつても。又もあづきりごとく思へ
どもといふをふくむるにもあらべし。かくする時は。上二句を。
なごの方と表裏にかけして。三句以下ハ。表裏初ニの意を一ツ
か受ていへばなり。

實之がそれかドトになん身はかりけ。

○は左派ハ、撰者たちのけ。えより五加らねること。又を
後人の五加するにう。いふてもさかひなり。きそ費
と主ハ、天慶九年卒と。作者が類ふてあり。

後撰和歌集卷第三新抄

